日本紀略 二月 三

吉田澄藏

日本紀略巻之三

二月 嵯峨と嵯峨と云中と春分と云○二月の長久 仲春 仲月 今月 紙と夾紵と云○二月のわかくと夜更まてゆくと云 七月 修文

きさらきはしめ ふるぬとをしはきぬさらぬ

いつと時せりしく異物は乃えてり

朔日 中和節といふ

二日 今日を社朔といふ 海記は乃えてり

○孟子乃生れ給ひ日なり 臺律考はいとく関む定王

三十七年四月二日孟子生れ

たきふきれつち

今の二月二日なり

○國俗奴婢を求ふ今日より来年二月二日まで

いとく朝に来る三月六日より九月六日まで

といて卯ます仕氏奴婢ハ財とかりて年数久

たく所の元奴婢とおもふよ祿乃めすきものを推べて
すべ才羅ひろものとあれどもよめむべうしろ賞賛
にて才あるものとあいきこゆ死てましなる主べたく賞賛か
るものと推べし　臘仁りいろく買奴僕必　粗衰有加る徐家者　毎才ひろて使
令ん多如ひるもれい多くい婢曲すりもろて
乃古き張よ上等のるよりりお多人とつて
いるもさきるり又地石ゐ巳い賞奴を使へり沈
下賤乃もの年久しもさけ人いるるずなもとに
てんはこりわごりてあやまち多きものあり
物ぬと一年と定めもそのんぬを武年と進し

八日　釈迦仏乃生日なり仏祖統紀ゆ周ゆ昭王二十
四年四月八日釈迦仏生とあり但周もゆの月をそ
四月ともれば四月ハ今乃二月ゆ当て深屠氏かる
事と考ぎして夏西の四月ともゆハ何やまゆ
つまりと古人乃説ゆ見えそうり
十五日　梶葉縁ゆ今日と也紙といふ書乃宗中ゆ
百花競ひ開く成かなれいこを一紙越黄と深
こころなり八月十五夜秋の宗中なる主ハ月女
こ号して月と賞するごとくいつり
○仏説ゆ今日釈迦入滅の日とて涅盤会と云

もろもろこれを建と考へやまれり掛どろの説邪
論は閑に穏なる十二年二月十五日佛涅槃すと記
せり月の二月は今は十二月なり去るを以今十二月
十五日といふ佛涅槃すべし

十八日　孔子の卒し給ふの日なり　孔子の卒の日法華
これは孔子七十代の後なり　くはつて一湯しがし

二十八九日　此時艾蓬を田野に掛め置て
ふべし上巳の菖蒲と共に邪を除くの
農夫と指南すべし

晦日　沐浴

まこかの日夜の長さひとしく昼四時なり
もろもろ夜行あるく日は出るまで二刻半と晴中
日入るまで二刻半と昏とす昏晩金で半時い
ねに属しいとまろは明るうなること昼に如
くれば日夜ひとしきはなり夜より日は長し
なるまで一湯未徴して湯薬半ばなり
なりくまこかよりて日夜ひとしきなり
まこかの日考妣先祖と称するもの元人家中にあるもの
考妣先祖より神をまつるべし考妣といふ死せる母
といふ先祖いふ祖父母より以上をいふ先祖のいとく

ゆゑ〳〵いたく考妣とまつる法云ハ男祖より父と
なり母より母となるゆゑ〳〵二つ祭る
俗とはすハち無義の義なり又母方祖
父我方の根本なり之をこゝに嘉祥と記して
時をふくこれと云ふを遠ふと過れ人也然日一年
よゝ日なり四月一日なり四月の忌い仲月紙
用ゆゝ嘉祥二月
まつるを可なり三日ハ祀日なり一年よ出一日也
和俗これと祥月とゆゑ毎月の月忌を古稚よ行ず
日年ゆゑ中ばよりなれり稚ゆゑ厚ふて法ふ

素食とるハ可なり春秋乃季ゆゑ忌日ハ行ふ
しめ斎戒ゆゑ平生ゆゑ食と設ふ
と俗之ゆゑ日本よ居ゆゑ乃蓋簋籩
豆ハ數形器と用ゆゑ呂考妣祖先の目新
たる物と用ゆ角ゆゑ又ゆゑ
食と用ゆれど日本ゆゑ今ゆゑ魚肉と
ゆゑ人ゆゑ國俗よ志ゆゑ
古稚よ志ゆゑ人也又云魚稚と考用ひ法宜く
土俗ゆゑ新酒ゆゑ
ゆゑ也ゆゑ古法よ法ゆゑ國俗よ

いにしへ　中納言藤原朝延より年ごとに二
度大学寮にて孔子を祭り二月と八月の
上の丁日始めたりける日　舞国忌形年のまつりかど
ゆかりれば中の丁よりあり但大学寮より孔子をはじめ
十哲と号して諸国より先聖文宣王先師孟子と
号る左宰府ふい先聖先師周子を奉ちまつりより
延喜式より式に事文武天皇大宝元年二
月ようちめれたりと　後日年紀　後苑花苑完寛
四年中まで　釋奠の儀ありしかの大
祀の後此儀絶　絶

家田大峯カ文集ニ飛屋ノトハ実ハモ有ヘシ

仏の化現人い上一人より下万民に到りまして天下
万世代師なるべし　中秋　八月
釈奠の礼式延喜式
江家次第等に詳なり

春分秋分の初日より三日あて日と始めて後
七日と仏氏名づけて彼岸と又彼岸の第四日
を中日と名ぐけ又時節といふ七日の間也
俗家より仏に供ず　僧法師等に
縁法花となづけこれを彼岸会と云　埃嚢抄に屋
敷神等にてめぐる法華彼岸　九月均等なる故彼岸と云
又日出日没の方彼岸　彼岸と云　彼岸

かくとなり此仏のごくあを丑ばこそよ蓋おひしゝ
事と思ひ出ることあれもちはけよかゞりて法華経法
とあり又仏の御ちゝ浴よ法へ灌はしくふすとなるべし
沐浴法の堂よりいとく成仏乃仏よ誕樹菩薩の記と
引て釈尊天乃例よ盂蘭盆ありてこの樹ひ二月
小花ひらき七日七夜あゝて後秋八月七日果来摩
訶迦葉梵天帝釋等各集りて七日乃百世間の美人五
人乃名と釈迦と生死彼岸涅槃彼岸放日宣取二七日
修善業上中下とゆり書給ふ此事たりあり如
ゆや祇園乃縁よ彼岸を日本乃風俗あり者

ことなりいとゞいとをしいとれたく成　国此
涅槃氏乃なの世乃事ふくゆ中毒天竺すいなる記事
なるゝ如古これとゝきり彼岸乃事と書たる天竺
強記と乃書一巻行りこれ天竺此菩提樹菩薩乃仏と
仏ゆよれたやゝ仏れゝ仏書あり成　国此仏の仏
てかくゝひなりとなるゝ又是涅槃ゆてひ
ゝんは事とこりくゝたくゝ書ゆりこれ誕此事
のゝとゝりをゝり多く仏書と引仏れゝ彼ゝゝ
書よいなる記るのゝ也と思ひ世俗これ此書と信ずゝゝ
ゝ仏ゝゝゝゝ社日ゝく春秋に二度土此祀と乃ゝ行り

土をよく方拍と書ひ又穀と生ひ故よみ為ま農の事はよろしきようとの祈いろは歌を祈ずるこ
とをなんその日は立春の後乃後第四の戊は日を社とし
立春は後第四の戊は日と稱ず紀氏を仲春擇元日命民社と云り元日は春日のこと
風俗通よいとく耕工はと倍しふ事遂とき社を
舟車乃到るところ是改はとうとく寒演すし
いふ事なし故に紀て社祀とす左傳よいとく世
氏ふ句龍氏といふ平水土故紀ていく社
紀郊特牲小厲氏乃王下とたるの時ふはと

農といふよく百穀を生ひ故よみ為ま農の
業継之故紀ていく稷とす芸立氏の九州て
覇ふ時その子を后土といふよく九州を平ぐ故に
紀ていく社とすといふ 蓺邑いふく稼百穀と植樹乃稷を百穀乃也ふり故に稷とふく
ふれ社を土祀ふり稷い穀祀ふり土穀
乃祀と為ふるを人民と生ずる故なり
こいふく社日ふい村民たがひに来往て酒食よ
酸飽と祈と乃えふり張演ふ社日乃待ふを為ふく技
ふ隣人帰と化ふり又は日乃酒よく聲と治む
故に治聲酒と生づくと海録碎事よりとふり

蓮もまた秋に付よりてうり秋の初うりと月令廣義にあり
まこもの湯煮の法やく穀にてゆがきて氷水にひたし
なりあがるまこもの節に入て後ちやく法菜蔬に煙と
なる法しまこものたねとうゆのまこもとをとるまと
蓮しまこもひとりして彼岸に抽たる稍とまくしつゆ
蓮民いせむらよたるとを去年しろ人のいろいとくち
としまこもを法湯にはれひとりしまこもひとりして一年の
大節あり事とまこもさらまやゝ瓜花菓の蔵とろ
ち行へしおそうしに付きねとまた根をとりちうゆ
瓜ものハ甜瓜菜瓜茄壺蘆冬瓜絲瓜胡瓜芋芝麻

櫻桃草地膚薏苡蓮蕖葛椒木綿蓮蘿蔔百合蓼
紫蘇萵苣甘藍ゆ牽牛子雞冠花唐木紅萱草根葵
等なり又凡藥草花等の根をとりちうゆ三三
月より但牡丹芍藥ちまこもうゆのよう法にすゝ又洗
月樹木をうつし植へし樹をとるハ
ゆ中旬より十月ハ樹をとるハ
ゆ中旬より十月ハ樹をとるハ又樹木を接へし梨を接
ゆ中旬より十月ハ樹をとるハ又樹木を接へし梨を接
ゆ中旬より十月ハ樹をとるハ又樹木を接へし梨を接
と用ひ柿を接ハまこもの後十月
と用ひ柿を接ハまこもの後十月
と用ひ柿を接ハまこもの後十月
はまこもの木に枝を挿ハまこもの又二月上旬より法に無
はまこもの木に枝を挿ハまこもの又二月上旬より法に無
本なる枝と芽ゆ芽蔓にして地より地めぐまいぶと

うゆるふまきこれり又ゝくし月法果をに培へし
し月法葉根と採るく根むゝし沈海中の筆紙て
ゝくく古法苗葉と採るよ多く二月八月を用ひこれ
苗よりまき苗ひ但二月ハ茎に茅ゝ八月ハ苗ゆゑ
根ど有よるるよ紀人知りやときれと茅ゝ生ていまぐ
良用ひ世ひ大率根と用ひ初を宿根ひゝい茎葉ひき
用ひるゝ津澤ゝれるの根よ嘗てはゆゑ生べたりこれと
伐ゝと甘ひ蓋菊地黄ゝとれるゝゝよ苗ひ紀ひゝれば
実して沈ゝり苗ひ用ひと並び廛ゝく深ゝりその宿
根ひるゝ拍ゝとれるゝ苗ゝ茅ゝ紀ひるゝゝ用ひる

ゝゝゝれひら根ゝびひるゝこよ見てまゝいまぐ暮ゝす
今茅ゝまゝ甘平ひゝ用ひゝれいすかゝら根ゝ解に
深ゝ遠ゝ用ひ根ひ遠ゝ無ゝゝれを効ゝり
茅と用ひ拍ハ茅初ゝ長ゝ長ゝ用ひ苗ハ
茅ひ有ひ用よゝ茅と用ひ拍ゝ初ゝ取ゝ用ひよ取
実と用ひるのゝ実と成すゝ紀取ゝれ深ひよ用月
とゝゝ人ひ秀土氣ひよ晩ひ天時悠休ゝ茅地
三月よ花ひるの深ゝ乃中ゝゝひら紀月よ
ひゝひゝゝゝ仙生遠大根茅ゝよゝく人月
茅花実ゝ茅根実ゝ用ひ紀茅実用ひ

此月日を撰び灸治をなし一切の病ある人々二月五月
八月十一月に灸して湯茶をたとへけれとも
へし此月三里線灸に七壯灸して毒氣と成ぬ
裏に記す脚氣衝心の病ありと書の叢書に入て
しる法の所書に虎狼人邪たゞして年月日時
潔て禁灸の日あり元素問雜經に左芳明醫
の灸ざるをあく淺世衛者の法を述べ伯ゞに是
ずたゞ四季の所に云いたの紙に切り灸い治す
あり然も大氏紙にあり之を腦にありと云る素
問の法にかれつるよ洗ふ鍼灸聚英に記せり

又此月毎日酒と樽の二百個稽とれいまと
申蕎初く赤と数の月切に実後の事と云
月令廣義に見てしり
天寧和曆の所部外山郎に拙記と解
曙とへし
茶子の法に仲春令に男女と云り又
周禮媒氏の法に陽交に成婚紀順天時也
此八月男女婚姻乳を約く宜しき月なり
此月遊と食へ大に養ふと千金方に入ぞ兎と食
へ鶴と鶏の雛とをとへんとやつ茨菰茶の法菊

〻〻ハ癇疾と霍乱と雷と食するなり大蒜と食
へし人をして気あらさらしむ小蒜と〻〻ハ人の
志情をやぶる能生魚と食すると忌又清流の流泉
を飲ことなり也瘧瘴と雷の月令廣義事實
叢書字ヲ誤ル

二月乃六候中一桃始開中二倉庚鳴中三鷹化為
鳩大蓼生乃三候なり中四玄鳥至中五雷乃
發聲中六始電大春分の三候なり
蓼蟄ハ晝四十七刻夜十分春分
晝夜平二刻十分春分
晝夜平刻 月令廣義

三月節と清明と云中と穀雨と云○三月の異名 春月 暮月 季月 蠶月
桃月 桐月 桃月と姑洗と云○三月乃和名と弥生と云奥羽地方
にハ風雨はなはだしくして花木ハ多くハ
ゆるやかに月と云と野甘りうつ

二日 沐浴 艾饌と製すべし

三日 今日を重三と云又上巳とも云上ハ初と云ふ也
いにしへハ三月初乃巳の日を以て上巳とす二月を
辰月と巳月とハ巳と渾日とす不祥を清くする事なり
流水の宋書に羅より後三日を用ゐ巳乃日ハ
御乃沢と云りけるく今日艾饌と食し桃花酒と
乃を艾饌と称ふなり
今日艾饌とハ云ふなり若くハ新菱宋粥汎て

三月二日麦麹乃汁とうれく密と合せ粉よ和す
名付て麦吾粉 音桜米 俗あり
と云なり又 東京よ麦麹 関中山陰陸奥
嚏不去 樊噲 雑米粉 合甜美 あり とけりこれとして
月五日 麦麹と用ひ とうえてより又
文政 寅孫 東一東よ田舎よ多 俗よ田舎
名づく二月よ始 業 俗 て 後 二月
三日よ婦女 これと 蕪 搗 俗 俗
うえく 粟 ひとり 月 月 俗
麦麹 と用ひ とうえ 月 ヒ

用ひ とうえ 丈 と 用ひ あり しまや 又 餘 餘 餘
ふ 乃 用 乃 蒲 五月 婦人 草餅 を 作 て 蒲
玉 よ 作 蒲 五月 味 美 と 義 て 二月
解 餅 あり 家 解 よ 城 世 解 乃 世 大 よ 作 蒲 よ
春 と 致 べ し と 作 人 事 と 作 二月
二月 よ 草餅 を 作 組 蒲 に 蒲 む 蒲 餅 の 如 作 色
よ り て 蒲 れ り と 蒲 ん 蒲 て 蒲 ひ 作 た 蒲 か 作 る 蒲 か
蒲 と 月 び て 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲
蒲 し と す べ 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲
作 ど 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲 蒲

とのむ事月令廣義に注夫まさを引ていはく三月桃
花とれるを酒に浸しひるまれとのめば病を除き邪を
たうるなりとあん桃花を酒に浸さばひるまの花と
用へし本草乃花を服すれば鼻血いてやまずと
事実はんえいより
○ちかごろ人情節に考姓先祖乃祭を此前に
とゝのゝむる徳あり世間乃人とかくすぶべき事な
れり俗節に元日乃上巳端午星夕中元亥猪など
乃類なりこれ世俗の貴ぶ所にてとのくろ拍
時食ふこと亥猪し宴楽はもつぱら考姓先祖ゝ

ざるいんなることなりよりて豈死に軽き事ハ生に重
きことこれ軽きことなるべし事乃さまたん
や前にいへる所乃果蔬等の類也時食ふ上巳の
草餅端午乃粽中元乃蓮葉飯亥猪の菊酒星夕
飯の類なり毛と魚とをとりて重箱に盛へし貴
和に雑煮とさゝもむる徳あれ
○ゆめ〳〵今日曲水乃宴を考ハ川乃上に遊遨
し被禊ふこと流水に觴とうべし桃の葉を酒
ざるに浮べ禊と称して飲ふこと欲
ふ事なり初觴と称すなどいふことなるべし

繽紛落花はいとく晉乃武帝尚書摯虞と同く
とく三日の曲水を義行のとり指や摯虞羽觴をいと
流れ韋帝乃時軍系れ徐肇三月初といく三人
乃女とまとうこ有よ到りて三人ともに小ゑ〳〵ぬ一村
の人いとく怪しとてこれと流れよ撥撥とく盥洗
し遊よ流水よ事とうくべてこれとのむ如の仁宴
きよ設まり帝のいとくはのこと有べ徒事
にもたりす尚書郎東晳こまとゆくいとく摯虞
小もなんぞこれときとんやむ〳〵周公ト去く流
邑とゆし流れに因とく庖とうぶあよ遊ないとく

羽觴浮波又秦れ服五三月上巳墨湯の如金人ま
てみ面より出水ん勿と指くいとく金人制有長安
及秦乃霸結侯因此去る曲水兼渥後漢ともり
お沼くこれ幾事とこれ帝乃いとく善金ゑ中行と
東晳よ羽ひ摯虞と左遷去く陽城乃金とせり
ともんきれと東晳り言を又一時の附金乃言ゑ
徒とるにあるに又風土記ゑ後漢の郭虞り事
とあげ行りしこと後漢書禮儀志ニ三月上巳安民
益禊祓于玄流水上と行まで漢れ時とでよこれる
行り部虞と結くとゆよあびこと鄭乃國の俗

三月上巳の日蘭を湯に浴して不祥を祓除する
行事は郭風より起る蓋水辺に宴する
俗なれども始久しき事なるべし　蕭穎士禊飲序禊飲
独也郭風有之蓋取洗
勾萌象陽氣敷無握芳蘭臨清川乘和蠲煩用徽分社芸義深
矣況文辯魯令三月宴序云曰禊飲古習也
秋　胡ゆく水乃家とかりる事　那須高貴
御家より始れりとぞ　国々も曲水
乃宴の行爲なるべし　を使たるや
殊楽会編より日本三百有餘　桃花水宴と
新撰京兆定家の宴乃事
紀とりなふまつやあらひのきりい水なるなれ

ゆえ花はさくつゆ　又三月廿日会と云事
世間ひとのあるを紀はあるけりつきれなるに
きるうふきを紀なるべし
○又今日鞠会とて鞠あり世俗同会とて
乃事なり明望門たゝ鞠と闘とあり
したがどなく俗よつまり少見あり
治鞠場と云所とあり鞠とりなるやうに
明皇八月の年　花闘鞠とこの
しよう　事鞠多俗
今按ずるに唐乃高宗乃事なり南城又老俗

浮世絵師伝之三

樓雲樓論語卷三

せし事に見えたり玉燭宝典に寒食の節城市
各鶏卵を闘しめて戯とせり又清明の日も鶏
をたゝかハしむる事あり先てあそひ事とす是侍り古に
此日虎乃鼓舞の本事も清明の日の事なり
かゝる事にて我国にも此日鶏合をするならハしあれ
闘鶏の事ハ左伝にも見えたれハ此[illegible]
○此日艾を簾の戸上にかけて風をはらふ家々に用ゆ
よしこ年今月今日に見えたり又壇年ハ元を下すなり
○今日めでたく女の子あるハ事にひなをかざりて
ちいさき人形をもてあそぶなり

事を源氏物語なりしも見て侍れハいふ也（下にくハ
しくあり又源氏に十にたらぬ人ハひなあそひそ
ひいなをつくるといふ事とあそんで十ばかりにてとむ
事なり又遠ふさにあそひし人形に衣服をぬひ
てこまかに帯なとをもとにこれをもてあそぶなり
源氏にも見えてひなあそひハひなのなり
[illegible]

晦日　沐浴　今日を三月尽とて上巳の書ハ湯餅の時
にして天気融和して草木萌し鳥啼花開人の
血気も和暢となれバ[illegible]

〇決きてさくさくはさまれぬるはなすまで郊聲よ
あけそひ公無小屯係して部老と美し春とと
百後擬集ヨ元河内弱恒の寄
くれてまし行ひとふなたまの日と紙ひきて
ふ無くくさん 玉蓼集に二月晦日と大伯ぶる
秋をすくれ木くてあつ乃鶯とてすりや
くふいつくん 又おたの納云る蓼の寄よ
光くりゆうん喜にやまてこもあてしてきこのこひ
無おちらけを行

賈島の三月晦日賜劉評事詩よ

三月正面三十日風光別我苦吟身苦天今夜不
須眠未可曉鶯猶是春
清明二月より二日前八日を寒食と云ひ日もろこしハ毎
年紙ハ墓所と掃除して寒となひるものの作とうや
これいつ〳〵する人風俗ちこと強ち程違ハいと意
食ら十月朔日展墓ハ可為多末初末初死志の生べ
故郷ハ志行ハ人ハ紙ハ墓所ハ掃す
〇さ事よ
此月親戚及交友と賞ス人ハ元宵と答とる事一切ハ酒
て屠とハ豊約ハ可ハ常人ハ生人ハ

客と共敬して楚美をこのむべし又酒醤に
て穢と先つ人すべし又酒と知らく人況て
先祖の廟に供ずる世俗親戚男女と食とるの習
と投ぐ淫楽を強しむ人情よ面で閉室と走るの
敗を美石に已して俗よ走ごうんとなるい平家葬
猥猥楽なども可なり人さう

三月天氣よくはもしろ有よ屋宅と掃ふ俗掃
と俗造し或茅屋と茨板屋と修葺とし
三月沼屋宅に行桑和と野家暦みを記せり
此月菜蔬花草よ菜苗よ植へし或板よ蒭苗三月

初又ハ中旬ようえてよりもやれいたりしこと有瓜
南瓜蜀黍玉蜀黍蕎麦烏芋紅豆豌豆菉豆扁
豆赤小豆刀豆胡麻薑眉児豆黍石竹地黄草藤
荊芥香薷など此月の節のうで先うえるよし
紅豆は三月の中より初く植とし又月の長きて
やりくうゆ二ハ又実のるを久し地雷泥なり西ハ
青かりうゆ二九菜蔬とうゆるいもわ紀よろ
しくやれば也やとく実のり屋内湯室蜜ろ
うゆへなり又その地氣内室暖によりて遅速のハり
なるし又此月本と接へ橘柑柚香橼内数を

清明の後より接てよりと月令廣義に見えたり
まこさ蕨とえむして厥とうきまぜ日よりしきいめく
かいり厥と浸ちて又日にほし收置べし食とる時
湯よりひしりやりて茅の根の如く煮て用の毛書毛
彩書の法なり或堀淹にして筆へし姫蕨は乾蕨と
まされりいんとなる也姫蕨は用やすし干蕨を
黐くちく傷よ用ひるべし又蕨と狗脊と姫淹の
元形のはるは去年の後七十又日と朝とるよし書田
蕨抄の書に見し伝也て今世松鄙の人ひとへなる様形を
言れし後三十日とはく蟄れ形すす書田の中

なす也て言年の後三十又日とはく花候こす年
の寒暖により生ずるとこと遅速有也
こと大やうたがひ良系部の八重桜をひやへ
桜は十日あまり早し奥ふと云ふの上八重桜
より稍候なるなり車一旬二旬或一月也
仁和寺は桜八海棠より早く開る故桜
を仁和寺の桜とおうれこと
世月小蒜及雞子と食へ次又禽獸の肉と食
車なすし生薤獐麻肉と食へると凍葅とくへば
瘡毒熱病と發ス月令廣義事
土良義云ハ歩

強まくいとくまと殺とるすくして天逆小性へば人を
たくまの命と迎しむ百草のん英紀菜と合すなり是
亀鼈と合くく化せざれば病疾を為す
三月乃古候第一桐始華第二田鼠化為鴽第三虹始
見　右清明の三候なり第四萍始生第五鳴鳩拂其羽
第六戴勝降于桑　右穀雨乃三候なり
清明い屋五十二刻十分夜四十七刻五十分穀雨
屋五十四刻十分夜四十五刻五十分　月令廣義

日本歳時記巻之三畢